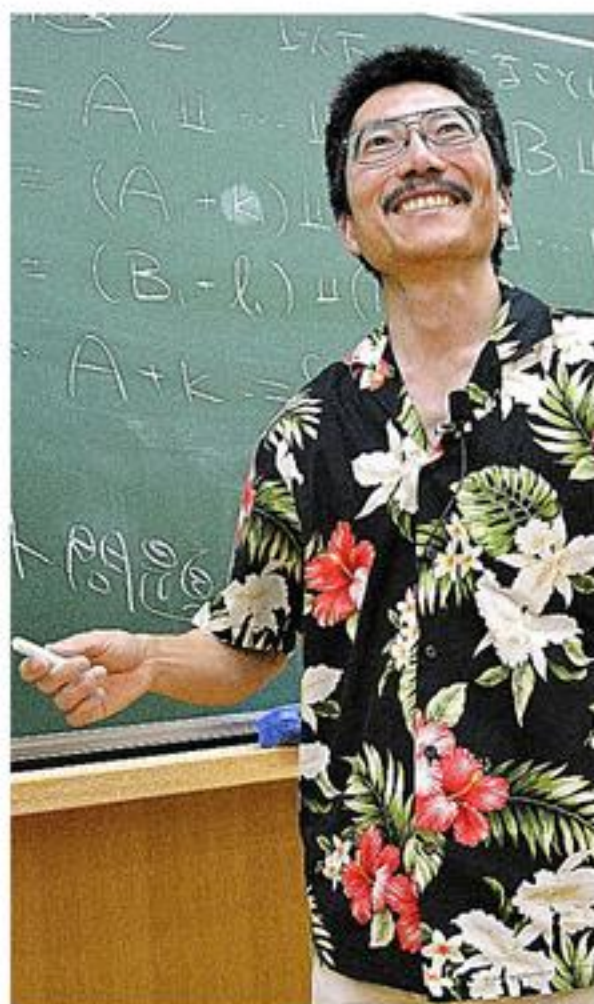


挑む!

アロハシャツの数学者

 なるたか
 小澤 登高さん(42)

密林のよらかな世界 答え追究



横浜市出身。日本数学会春季賞、日本学術振興会賞などを受賞。アロハシャツは自宅に30着以上ある。

アロハシャツに短パン、サンダル姿で、京都大学での数学講義に立つ。ハワイ旅行を機に着始めて、20年間ほぼこの格好。「学会で初対面の研究者にも名前を覚えてもらえます」と笑う。京大数理解析研究所の教授を務めて

いる。その外見とは違って、発表する論文の切れ味は鋭い。1000ペを超す論文もある数学の世界で、未解決の問題を解いた「出世作」はA4判で4ペ。既存の理論を一新した論文は7ペ。「恐ろしく強い結果を、驚くべき

短い議論で証明する」と評される。専門は無次元の空間を探る「作用素環論」という数学。図形を研究する幾何と、微積分の解析を駆使し、超高速計算や情報通信の研究に影響を与える。

子どものころは虫取りが好きだった。中学時代に興味を持ったのは、科学雑誌で読んだ宇宙の世界。東大に進んだが、バイトとTVゲームにはまり、大学の講義の半分は昼寝して聴き逃した。数学に魅力を感じていたが、研究者になる自信はなかった。転機は大学院時代の米国留学。「半年間、誰とも話さず一人で必死に努力した」。自力で道を切り開く自信がついた。

出口のないジャングルのような数学の世界だが、何かに導かれるように答えにたどり着くときがある。「そのときの驚きと感動が、私の原動力です」

文・石倉徹也 写真・堀内義晃

記者から

夢の中でも解法がひらめくが、大抵は間違えているとか。難解な分野ですが親しみも感じます。